

## 岩倉具忠著『ダンテ研究』

創文社, 1988年, ix+464頁

清瀬卓

本書は、ごく初期の習作的詩歌から晩年の大作『神曲』にいたるダンテ文学の生成という、まことにオーソドックスな課題に肉薄せんとした研究である。ダンテはなによりもあるべき詩的言語の達成をめざして生涯変貌とどまるところを知らず、ついにはいわゆるメタ言語的領域にまで突入するに至った、きわめて現代的な詩人である。そのピカソ的とても形容するほかはない目眩めき遍歴の跡を、著者は神経質なまでにマニャックで精緻なテキストの読みとりを通じて忠実にたどってみせる。その成果をじつに洗練されしかも平明闊達な文体によって描いてみせた点において、本書はわが国における唯一最初の本格的なダンテ研究であるとともに、これからダンテ学に志すものすべてにとって恰好のチチェローネたりうるであろう。

欧米諸国のダンテ研究は、徹頭徹尾テキスト・クリティークすなわち本文校訂に終始すると言ってもよい程に、文献学的である。文芸学あるいは文学研究とは、文献学の異名であると言ってもよいほどである。文献学の歴史はきわめて古く、古典研究および『聖書』研究の伝統のなかで、培われてきた本文校訂のための方法論である。ダンテの著作について言えば、その自筆原稿のことごとくが、死後間もなく散佚し、『神曲』の場合、いわゆる流布本 (vulgata) の系統とそうでないものと大別されるかたちで、数多くの写本が伝わっているに過ぎない。われわれはダンテの著作のオリジナルな姿を知らない。ダンテの著作をそのオリジナルな姿に復元せんとするシジフォスの神話のごとき努力が、欧米におけるダンテ研究を今日のレベルにまで引き上げてきた。

したがって著者はそうした欧米の文献学的手法を絶えず意識しながらも、まず第一にダンテの言語観を明らかにすることをもって、研究の端緒とする。それはわが国におけるダンテ学の盲点を突く野心的企てである。と同時にロマンス言語学およびロマンス文学の射程内において、ダンテの詩的言語のもつ革新性を実証するとともに、

日本語はもちろんのこと、今日のイタリア語のコンテキストによるのではなく、ダンテを彼の時代のことばの状況のなかに正しく位置づけようとするところみでもある。その意味において、本書はダンテの言語理論がもっとも端的に述べられている未完のラテン語著作 *De vulgari eloquentia* 論であると言ってもよい。事実、本書は第5章から第7章にいたるかなりの部分を『俗語詩論』の考察に当てている。さらには、本書の刊行に先立って、著者はこの著作を従来とは異なった観点から解釈しなおし、膨大な量の註解を付した対訳版として世に問うている（岩倉具忠訳註『俗語詩論』東海大学出版会、1984年）。つまるところ、およそ十年間にわたって続けられてきた著者のダンテ研究のメイン・テーマは、ダンテとことばということになるのであって、ダンテの著作の背後に見え隠れする百科学的教養世界についての言及は、あくまでこの主題へと収斂してゆく予備的考察にすぎない。

ダンテ学には、今日なお解決の糸口が得られない難問が意外にも多い。たとえばダンテの自筆原稿が伝わっていないこと。このことは、聖トマス・アクィナスとともにその時代を代表する人物であることを考えれば、不思議なことである。この点については、ダンテがその後半生をいわゆるデラシネという特殊な状況のなかで送ったこととの関係が指摘されよう。さらに、ダンテの知的教養形成についても、知られるところはほとんどなく、いぜんとして謎の部分であることにかわりはない。

しかし、幸いにもダンテはつねに自説を折に触れて批判的に反芻するタイプの思想家でもあり、いわゆる典拠 (*auctoritas*) を詳かにする労を厭わない。したがって著者はそうした典拠に着目することによって、ダンテの考え方の源泉へと溯り、そこから彼の若き日の教養形成を再構成してみようとする。「知的形成とその背景」と題する第一章では、主として T. Ch. Davis (1929—) の力作 *Dante's Italy and other essays*, Univ. of Pennsylvania Press, 1984 で展開された学説に依拠しながらも、著者はあくまで青年ダンテが受けた教育の実践的特質を強調する。すなわち、当時の都市国家フィレンツェにあっては、そのコムーネ社会にとって有為な人材を育成することが、教育の第一の目標だったわけである。その意味において、ダンテの受けた初等教育ですら、商業都市特有の実務教育であったとされる。さらに中・高等教育に関しては、ダンテの教養形成に尽大な影響力をもった三つの流れを想定している。サンタ・マリーア・ノヴェッラを拠点とするドミニコ会、サンタ・クローチェを活動の中心とするフランチェスコ会、そして市の書記局に集う世俗的知識人サークル。しかもこれ

ら三つの学統はともにフランスからもたらされたものであり、ダンテの教養は基本的にフランスの色彩を色濃く帯びているとされる。いずれにしても、ダンテの百科的教養の素地は、この僧院によるスコラ学的伝統と市民的人文主義の先駆けとなった世俗の伝統とによって準備されたのである。しかもその偏りのない百般にわたる知識は、主として florilegium ないし excerpta の類、つまり摘要や摘録にもとづくというのが、著者の結論である。

さて、著者によれば、ダンテは同じく詩人を意味することばを使用するに際しても、古典の大詩人を指す場合には *poete* という用語を、逆に俗語の詩人たちを指す場合には *dicatori, rimatori, versificantes* 等の用語を意識して使いわけているとされる。この事実は、ともすれば看過されやすいが、ダンテのこうした意識的な用語法を分析すると、そこから、いわゆるローマニア全域にわたる当時の詩的状況が明らかになる。結論を先に言ってしまうと、ダンテはみずからをいわゆる南仏抒情詩にはじまる *Fin' amors* の概念を徹底的に改革する者として、またなによりも学匠詩人 *poeta doctus* として位置づけている。そうした自己の革新的役割を、アレゴリカルな挿話の形をとって物語ってみせたのが、『新生 (*Vita Nova*)』第25章なのである(第2章)。著者は、当時一世を風靡していた詩派グットーネ・ダレッツォを祖とするグットーネ派の詩論に対するアンチ・テーゼとして、グイード・グイニツェリおよびグイード・カヴァルカンティ等の清新流派の詩学を考えている。さらには、この粗雑きわまりないグットーネ派の詩作に向けられたダンテの感情的リアクションをも、『新生』の文面から巧みに読みとろうとする。

たしかに、『新生』を清新流派の詩学を表明したプロパガンダと解釈する著者の立場は、じつに魅力的であり、説得力に富む。こうした創作活動の現場にあっても絶えず批評家としての眼を注ぐ詩人ダンテのユニークな姿勢に着目すれば、おのずとそこに、未完のまま放棄されざるを得なかった二つの論攷、『饗宴 (*Convivio*)』と『俗語詩論』の意図するところも推察されるのである。そしてこれらの論攷は、とうぜんのことながら詩人ダンテのさらにいっそう新しい境地への到達点をしるすものである。

では、『新生』の冒頭に配された第1ソネットの頃のダンテの詩作は、どのようなものであったろうか。この問いに答えてくれるのが、本書の第3章である。そこに著者は、コムーネの文化的要請にそった詩作活動で、その時代の流行を作り出したグットーネ派の技法を、自家薬籠中のものとしてゆくダンテを見る。と同時に煩瑣で晦

波な技巧の束縛を脱し、さらに鮮烈直截な表現を編み出してゆく若き日の詩人の姿を認める。このグィットーネ派を標榜する先輩格の詩人ダンテ・ダ・マイアーノとの間で交わされた「口論詩」を、のちのリアリズムの手法を鍛えた時代へと繋げてゆくことによって、ダンテの詩的言語の段階的達成の中に正しく位置づけてみせた本書の意義は大きい。

ところで、詩人ダンテは俗語散文の成立史上においても特異な存在である。『新生』の散文について」と題する第4章は、いかにしても自己の詩作の秘訣について、体系的に語らざるを得なかったダンテの内的要請に焦点を合わせながら、自注 (auto-commento) の散文が、批評家ダンテを代弁するものであること、そして注解の様式はなるほどスコラの伝統的手法に則っていることは事実であるが、ダンテの場合、むしろキケローの『創作について (De inventione)』の俗語版、すなわちブルネット・ラティーニの『修辞学 (La Rettorica)』に範を仰いだものであることに注目している。その意味で、著者はコムーネにおける市民文化の興隆とのかかわりを強調する。同じく、自己の創作をある一定の時間をおいて解釈しなおした『饗宴』では、祖国追放を契機として、ダンテの関心はますます倫理的色彩を強めてゆく。そこに著者は自己の立場を政治的に正当化する傾向を指摘している。第5章では、その執筆年代の検討がなされる。この作品は『新生』と『神曲』とを橋渡しする著作で、ダンテが都市コムーネ特有の地方主義的限界を克服する過程を示す。そして詩論においても言語理論においても、ダンテがより普遍的な視座を獲得してゆく様子が浮き彫りにされる。

いうまでもなく、ダンテはその生涯を通じて実験的詩作を試みた詩人である。本書の第8章は、その独自の詩のスタイルを確立するうえで、きわめて大きな役割を果たしたと考えられるリアリズムの詩をあつかっている。すなわち、フォルレーゼ・ドナーティとの間で交わされた「口論詩」と「石の詩 (rime petrose)」がそれである。創作の時期からいえば、第5章の前あたりに按配されてしかるべきものであろう。ひとくちにリアリズムといっても、ダンテの場合、「口論詩」と「石の詩」ではその性質を異にしている。著者の指摘にもあるように、「口論詩」の技法はチェッコ・アンジョリエーリの諷刺体のみならず、フォルゴレー・ダ・サンジミニャーノの写実体の流れを汲む。一方、「石の詩」の場合、むしろ息の長いカンツォーネという詩型の限界をためすところみである。しかも南仏トゥルパドゥールの技巧派 (trobar clus) をも、その技量において凌駕せんとした一世一代の賭けでもあったと書評子は見ている。とい

うことは、ダンテの詩的力は、すでに祖国追放の時点で、何人の追随をも許さぬ段階に到達していたということになる。

そうした強固な自負心を内面に秘めながら、ダンテは自己の文学史的立場づけと、第7章にある「表現美」の理論を意識するようになるわけである。自己の詩業の文学史的定位のために、また創作実践のなかで胚胎しつつあった文学的詩語を求めて、ダンテはローマニア全域にわたる地域言語の吟味と、そうした言語で詩作した先行の詩人たちの評定をおこなう。著者は *De vulgari eloquentia* で展開されているダンテの言語観を、たとえば語彙のレベルにいたるまで、ひいては語感のレベルにいたるまで分析することによって、「高貴な俗語 (vulgare illustre)」の実体に迫まろうとしている。

ひとくちに言ってしまうと、ダンテの潜在的表現力は、自然言語の可能性をはるかに凌駕していた。たとえていうならば、J.S. バッハの音楽的感性が、当時の楽器の表現能力に飽きたらなかったように、ダンテの詩人としての感性は、自然言語の表現力に飽きたらず、思弁文法学（付論2）にみられるメタ言語的性格を具えた人工言語を必要としたわけである。『俗語詩論』で説かれる「高貴な俗語」は、いかなる地域のいかなる詩人のことばのなかにもついでに見出されなかった。著者も力説しているように、この詩的言語の達成は、『神曲』の旅路のなかで、つまりウェルギリウスとの対話やベアトリーチェとの邂逅のなかでこそ成就されるのである。

最後に、本書は基本的に *De vulgari eloquentia* 論と考えられ、著者もはっきりと断っているように、第9章以下はいわば余論の性格が強い。それらの章でとりあげられているテーマは、いわば著者の今後の課題である。ある時代の読者が『神曲』をどのように読み、またダンテをどのように評価してきたか、こうしたテーマに本格的に取り組もうとしている著者の意気込みが、多少なりともそこに感じられなくはない。